

神奈川県相模原市

お び の っ ぱ ら
大日野原遺跡 2011 年度発掘調査概要報告書



2012 年 3 月 31 日

中央大学文学部 小林謙一

おびのつばら
大日野原遺跡（相模原市 No.465）の発掘調査実施概要

1. 遺跡の名称	大日野原遺跡（県遺跡番号：相模原市 No.465） 相模原市緑区澤井ケッサイコ 748
2. 発掘調査実施組織	中央大学文学部（文学部長 河西良治、調査担当者 日本史学専攻小林謙一）
3. 発掘調査の概要	2011年度は、2011年7月29日から8月13日において現地発掘調査を行った。縄紋時代中期の竪穴住居を9基以上確認し、うちSI-01,02,03についての発掘を行った。 遺物に関しては縄紋時代中期勝坂式・曾利式・加曾利E式土器および石器が天箱7箱分出土した。また、住居に伴う埋甕1、石囲埋甕炉1を確認している。
4. 発掘調査の体制	中央大学文学部日本史学専攻准教授 小林謙一 相模原市立博物館学芸員 河本雅人 中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士前期課程 矢嶋良多 福原里枝 中央大学文学部・考古学研究会、首都大学東京・立正大学学・早稲田大学 学生及び院生33名、相模原市立博物館ボランティア10名
5. 出土品等整理計画の概要	調査終了後に中央大学において実施中である。
6. 報告書刊行予定時期・出土品の取り扱い	引き続き調査が継続されるため、報告書は成果がまとまり次第刊行予定である。出土物は、整理作業中は中央大学で保管し、整理作業終了後は相模原市に移管する。
7. 発掘調査成果概要	遺構確認（縄紋住居跡9基以上、性格不明遺構1基） 遺物（縄紋土器（中期勝坂式・曾利式・加曾利E式）、石器、古代土器）
8. その他・特記事項	平成22年度科学研究費補助金（基盤C）「炭素14年代による縄紋集落の研究」（代表小林謙一、課題番号22520774、2010～2012年度）による学術調査である。 相模原市立博物館（考古部会・大日野原遺跡の研究）の調査協力を得ている。

大日野原遺跡（相模原市 No.465）の発掘調査の経緯と成果

1) 調査の目的

日本考古学では、炭素 14 年代測定の結果を年代的位置づけに取り入れることについて、いまだ十分な評価がなしえないような状態である。世界史的な視野の中に日本先史時代を位置づけるためには、縄紋時代の炭素 14 年代測定研究を進めることは、緊急の課題である。

縄紋時代の集落研究は、土器編年研究と並び、日本先史考古学の大きな柱となってきたが、その内容は決して十分な成果とは言えない。高度成長期による大規模開発に伴う広域調査により、集落調査例は膨大なものとなったが、かえってその実体については不明確となり、特に最も遺跡数が多く集落も多く発見されている東日本縄紋中期についてみると、同時存在住居の把握や集落の定住性について、異論が続いている。同一の集落例を指して一時期に 100 軒の集落が長期に定住と考える研究者と、1 時期には 1 軒しかなく短い期間で移動とする研究者が、実証的な研究に立ち返ることなく、仮定に基づいた縄紋社会像を組み立てようとしている。膨大なデータとなった集落調査例を集成すると同時に、集落の内容をどのように時期区分するかを検討しなくてはならない。そのために、科学研究費補助金によって、縄紋遺構・集落の年代研究を行うこととした。

具体的には、縄紋時代中期住居の構築・使用・廃絶・埋没・再利用の考古学的コンテキストごとに、合計数十点の試料を現地で観察しながら採取して、土器付着物・伴出炭化物の炭素 14 年代測定を行い、暦年較正年代を算出し、統計的に処理することで、遺構ごとの継続期間を明らかにしたい。同時に、竪穴住居の居住や廃棄後の埋没期間などのライフサイクルに関わる年数を検討したい。そのために、縄紋中期集落の良好な遺存が期待できる相模原市大日野原遺跡の住居の調査を行い、竪穴住居ライフサイクルを明らかにしつつ、年代測定用試料を採取したいと計画した。そのための予備調査として、2008 年度は縄紋遺構の確認を目的としたトレンチ調査を行った。2009、2010 年度はその成果を踏まえ、発掘面積を広げ、住居址の確認を行った。そして、2011 年度 SI-02 の完掘を最大の目標に、主に住居の切り合い関係が明確である SI-01,02,03 の調査を行った。

2) 調査経緯

2007～2009 年度より実施した科学研究費補助金基盤 C「炭素 14 年代を利用した縄紋時代の住居期間の研究」（課題番号 19520662）の考古学的調査の一端として、相模原市大日野原遺跡の発掘調査を 2008 年度より行っている。その際、2008 年 7 月に相模原市教育委員会と中央大学文学部との間で「大日野原遺跡の共同調査に関する協定書」を取り交わし、協力して調査を行うこととした。具体的な調査地点は、以前に旧藤野町が 1987 年に調査を行い、古代の住居跡を調査し、縄紋時代の住居が確認されている地点（藤野町 1995）の隣部を対象とすることとし、地主の遠藤厚子氏の発掘調査承諾書を得た。また、周辺住民・

農地所有者、相模原市役所藤野支所の協力を得た。2008年度はトレンチ調査を行い、遺存状態のよい縄紋中期堅穴住居の広がりを確認した。続いて2009年度ではSI-01の全体のプランを確定すると共に、他の住居跡との新旧関係を把握することを目的として調査し4基以上の重複する住居群を確認するなど一定の成果をおさめた。次いで2010年度より科学研究費補助金C「炭素14年代測定による縄文集落の研究」（課題番号22520774）における調査として2010年度には堅穴住居跡3基の掘り下げ調査を行うこととした。あわせて中央大学における考古学教育の一環とするために中央大学文学部が調査主体となり、調査担当者は上記科学研究費の研究代表である中央大学文学部日本史学専攻の小林謙一准教授が調査担当とすることとして、埋蔵文化財保護法92条第1項に基づく発掘調査の届けを7月に行い、受理を受けた。

現地調査は以下の日程で行った。

2011年7/29 現地調査開始、8/13 片づけを行い、2011年度調査とした。なお、8/12午後には現地説明会を行った。また、8/5には、藤野公民館により発掘体験教室が行われ、子供たちが発掘を体験する行事に協力した。

3) 調査参加者・協力者

調査参加者

小林謙一（中央大学）、河本雅人（相模原市立博物館）、黒尾和久、小林尚子（セツルメント研究会）、味噌井拓志（中津川市文化振興課）、永田悠記（静岡県埋蔵文化財課）、納美保子（下総考古学研究会）、矢嶋良多、福原里枝、小澤政彦、大西勝晶、大塚亮、土井友、太田立、今泉沙希、滝瀧あずみ、田中悠衣、植田聡、松山功祐、山田英就、野村敬宗、吉田廉、妹尾崇、尾林亮一、坂井聡一郎、大作祐太郎、大谷亮介、太田芳樹、米丸広樹、岡本一希、新内谷早紀、田村麻梨菜、白石桃子、中間春香（中央大学）、橋本望（首都大学東京）、渡辺淳子（早稲田大学）、中村貴大、小川淳平（立正大学）、荒井基喬、市川憲子、鹿山茂樹、神垣真理子、千葉宗嗣、西本志保子、守屋之栄、三嶋最都子、村上金四郎、和家洋壽（相模原市立博物館ボランティア）

調査協力者（順不同、敬称略）

門倉睦男（藤野中央公民館長）、坂庭京（藤野中央公民館）、森川哲郎（沢井公民館長）、谷古宇和也（相模原市立総合学習センター）、大村裕、建石徹、大内千年（下総考古学研究会）、宮田公佳（国立歴史民俗博物館）、大網信良、平原信崇（早稲田大学）、中澤寛将（青森県教育庁）、中川真人、領家玲美（相模原市教育委員会教育局生涯学習部文化財保護課）、調布市教育委員会、相模原市教育委員会、藤野支所、遠藤厚子（地主）、島地慧、小川翔（中央大学）

4) 調査日誌妙録

7月29日	機材搬入・草刈り・昨年度の調査区の再確認
7月30日	前年調査地点まで掘り下げ
7月31日	前年度調査区の壁面の確認
8月1日	SI-02 掘り下げ開始
8月2日	SI-02 の南面から炭化物の集合部分を確認
8月3日	昨年度設定した D1、D2 区の掘り起し SI-02 東面3層にて遺物集中を確認
8月4日	SI-01 床面より SI-05 の周溝を確認
8月5日	SI-01 床出し 地元の子供たち向けに発掘体験
8月6日	SI-03 炉周辺掘り下げ
8月7日	I 層、II 層の土壌サンプル採取
8月8日	SI-02 床面一部検出
8月9日	SI-08 を確認及び掘り下げ SI-02 埋甕取り上げ
8月10日	SI-02 土壌サンプルの採取 SI-03 炉体土器取り上げ SI-02 の床全面検出 SI-09 確認及び掘り下げ
8月11日	D1、D2 区埋戻し
8月12日	SI-02 完掘・写真撮影 現地説明会 埋戻し
8月13日	埋戻し・機材搬出

5) 2010 年度の調査成果 (図 1 ~ 8)

検出遺構

2011 年度の調査では、SI-02 の完掘を最大の目標に調査を行った。また、SI-02 と切り合っている SI-01 及び石囲埋甕炉が確認されている SI-03 の調査も並行して行い、SI-02 との時期的な関係を明らかにすべく発掘を行った。さらに、昨年度と同様に D1・D2 区についても調査を行い、SI-07,05 の範囲、切り合い関係について再検討を行った。各調査区の配置は図2「調査区略図」及び図3「2011 年度遺構平面図」の通りである。なお、今年度の調査面積は 82 m²となった。

A 調査区からは、前年度までに SI-01,02,03,05,06 の 5 軒の切り合った住居跡が確認された。その中で最も新しい住居跡が SI-06 であり、SI-01,02 の上面から確認された。地床炉

と思われる炉跡が確認されているが、掘り込みがなく住居の範囲が不明確である。炉跡を中心に曾利Ⅲ～Ⅳ式を中心とした遺物が集中しているため、掘り込みの持たない「加曾利 E 3 面住居」と想定できる。

次に新しい住居が SI-02 であり、本年度調査では完掘まで行った。方形を呈した住居跡で、入口部（埋甕埋納部）が突出した潮見台型住居（久保ほか 1971）である。支柱穴は 3 つ（SI-02Pit-01,03,04）で、炉を中心に三角形状に配する。入口部は真南を向いており、柱穴・地燃炉・埋甕が一直線に並ぶ構造になっている。炉は地床炉であり浅い掘込を持つ。埋甕は加曾利 E 3 式であり、石蓋がされた状態であった。また、東側の覆土中からは曾利Ⅲ式を中心とした遺物が集中して出土しており、何らかの廃棄行為が想定できる。

SI-01 は東側半分を SI-02 によって切られており、SI-01 より古い住居である。炉は石囲炉であるが、炉の半分は SI-02 によって壊されている。柱穴は 2～3 つで、柱穴直上に大礫・土器を置いた状態で発見さされた。これは、柱穴を埋めた後に意図的に大礫や土器を埋設したと考えることができ、なんらかの廃絶儀礼が想定できる。また、床面からは浅鉢および、昨年度出土した曾利Ⅲ式の SK-03 直上出土台付甕が出土しており、SI-01 廃絶時の所産であるといえる（註 1）。

SI-03 は SI-02 及び攪乱などの切り合いが多く、住居範囲は不明確であるが、中央部に石囲埋甕炉を確認した。炉体土器は曾利 I 式（図 8）である。

旧北拡張区からは新たに SI-08（註 2）,09 が検出された。SI-08 は周溝が確認しており、SI-01,02 によって切られている点（註 3）などから、これらの住居より古いころがわかる。SI-09 は SI-08 を切っており、SI-08 より新しい住居が確認できる。しかし、SI-08,09 ともに SI-03 との切り合い関係および、時期を決定する資料が乏しいため、今後の検討課題となる。

D1,D2 調査区では SI-05,07 及び SX-19 が検出されている。SI-05 は A 調査区の SI-01 床面にも周溝が検出されている。SI-07 は SI-05 に切られていることが確認されている。共に住居確認面から勝坂式の土器片が出土しており、当該期の住居と想定できるが、まだ不明確な点が多い。SX-19 は近現代の遺構である。

その他の遺構としては SI-01 を切るかたちで SK-04 が検出され、貯蔵穴だと想定できるが、現在整理中の為、詳しいことについては追って報告をする予定である。

D1・D2 調査区からは

調査区における住居跡の新旧関係については図 5 の通りである。また、出土遺物に関しては昨年度同様に、縄文時代中期の勝坂式、曾利式、加曾利 E 式を中心に出土しているが、現在整理中であり、詳細は正式な報告をもって行いたい。

出土土器（図 8、9）

主に縄文時代中期中葉から後葉にかけての土器が出土している。

図 8 は SI-03 石囲埋甕炉の炉体土器である。曾利 I 式の長胴甕であり、頸部に横位の鎖状隆帯が 2 本巡っている。また胴部には刻み目の入った 2 本 1 組の隆帯が垂下している。地

紋は半裁竹管による条線であり、隆帯を施紋後に地紋施紋を行っていることがわかる。

図9は住居覆土出土の土器片である。1~3は勝坂式である。1は胴部破片であり、隆帯脇および区画内に三角押紋による施紋が確認でき、勝坂1式にあたる。2は口辺部破片であり、隆帯脇にキャタピラ紋、区画内に三叉文が施されている。3は台形状隆帯に刻み目が入っており、沈線による渦巻文の意匠がみられる。

4~7は曾利式である。4・5は胴部の破片資料である。隆帯上に刻み目を持ち、隆帯脇に蛇行粘土紐が貼附されている。5は振幅が大きく、時期的にも古いものと想定できる。6は胴部破片であり、押し気味の刻み目のついた2本1組の隆帯が施文される。地紋は条線で、細い半裁竹管によるものである。7は胴部の破片資料であり、地紋は斜行状の条線である。沈線区画されており、H状の腕骨文が確認できることから、曾利Ⅲ~Ⅳ式の土器と想定できる。

8は加曾利E式土器である。口辺部から頸部にかけての破片資料である。地紋はLRの縄紋地紋である。口辺部は四角状の区画と渦巻文がみられる。また胴部には沈線により区画がされ、一部縄紋地紋もみられるが、磨消の意匠が確認できる。

<註>

註1) 昨年度の概要報告では、SK-03に付帯する土器と考えられていたが、SI-01床面のレベルから出土した点、土器が比較的新しい点などからSK-03直上出土台付甕・浅鉢はSI-01が廃棄された時のものであることが明らかになった。

註2) 昨年度まで概要報告では、SI-08の周溝をSI-03の周溝と想定していたが、SI-03の炉周辺の床面のレベルとSI-08の床面のレベルが異なる点などから新たにSI-08のつ物と断定した。

註3) 2008,2009年度の調査で、SI-08(当時SI-03)の上面にSI-01の覆土が確認されている。

<参考文献>

- 今福利恵 2005 「曾利式土器編年再考—甲府盆地を中心に—」『山梨県考古学協会誌』第15号 山梨県考古学協会
- 榎原功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨県考古学論集Ⅳ 山梨県考古学協会20周年記念論文集』 山梨県考古学協会
- 久保常晴・伊藤秀吉・関俊彦 1971 『潮見台遺跡』中央公論美術出版社
- 小林謙一他 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループセツルメント研究会
- 小林謙一 2009 『相模原市藤野町大日野原遺跡2008年度発掘調査概要』
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 2002
「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ—中期後葉期 加曾利E式土器文化期の様相その2 土器編年案—」『研究紀要7 かながわの考古学』(財)かながわ考古学財団
- 永田悠記他 2010 「二〇〇八年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』33号 中央史学会
- 藤野町教育委員会 1978 『藤野町の埋蔵文化財』
- 藤野町 1994 『藤野町史 資料編上』
- 藤野町 1995 『藤野町史 通史編』

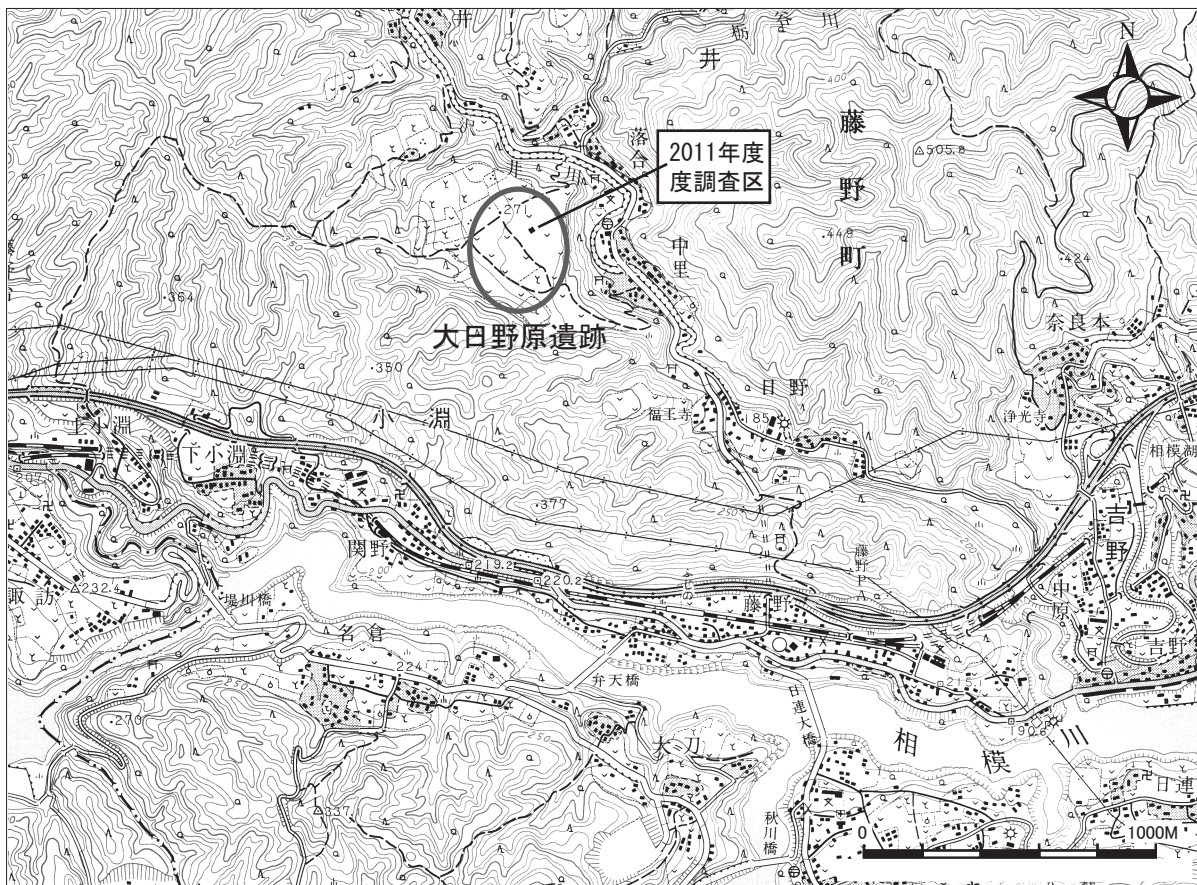


図1 大日野原遺跡2011年度調査区の位置

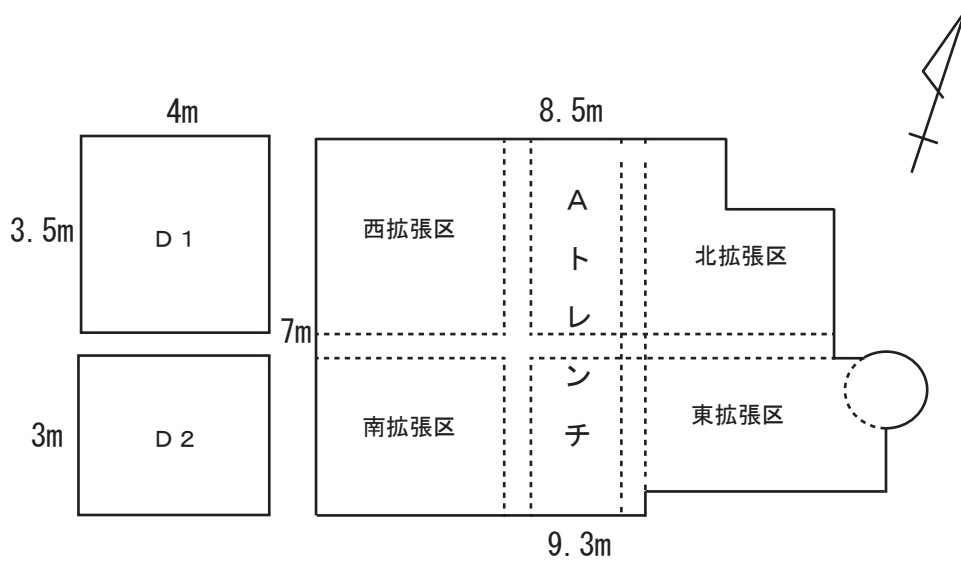


図2 2011年度調査区略図

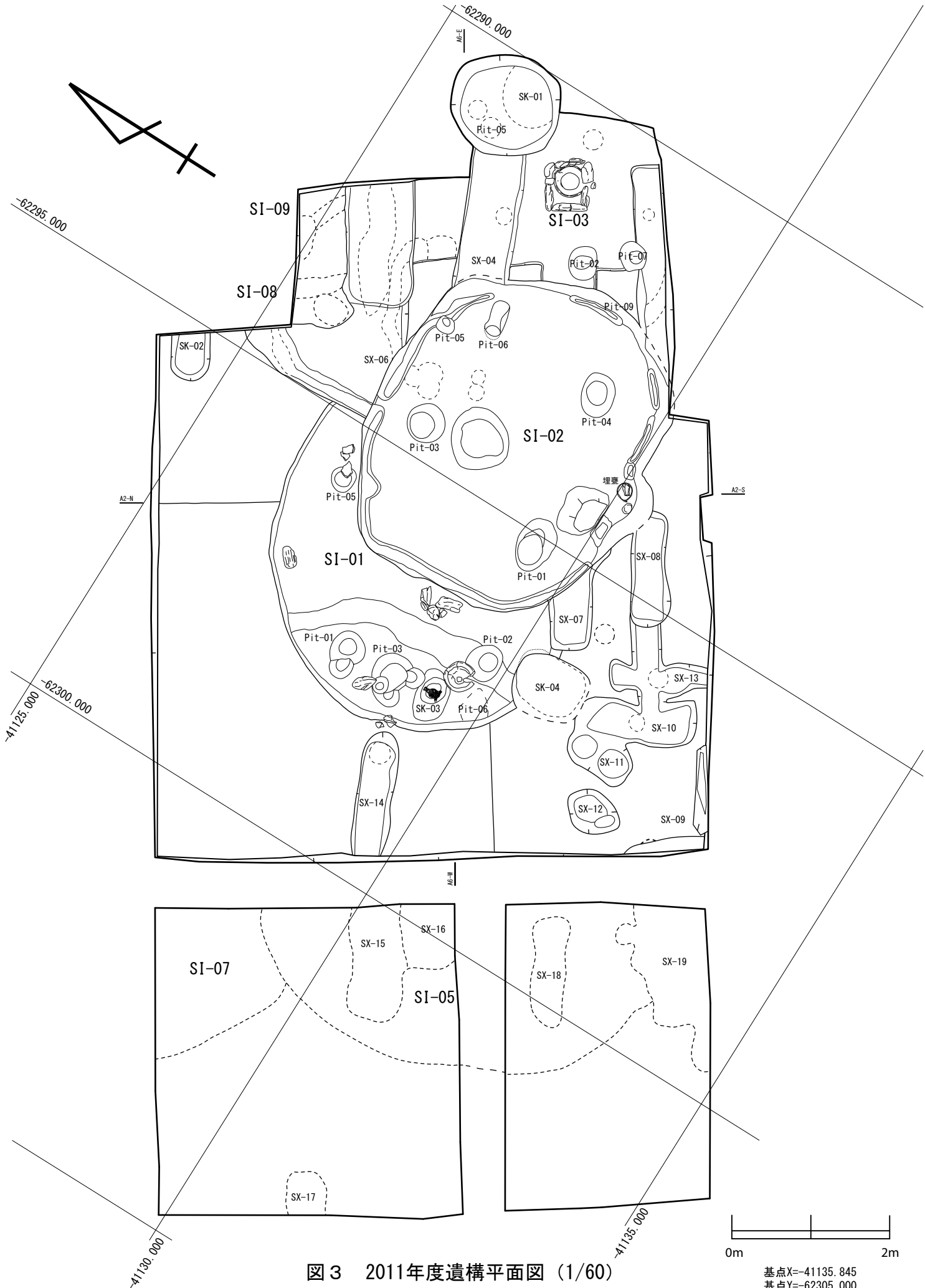
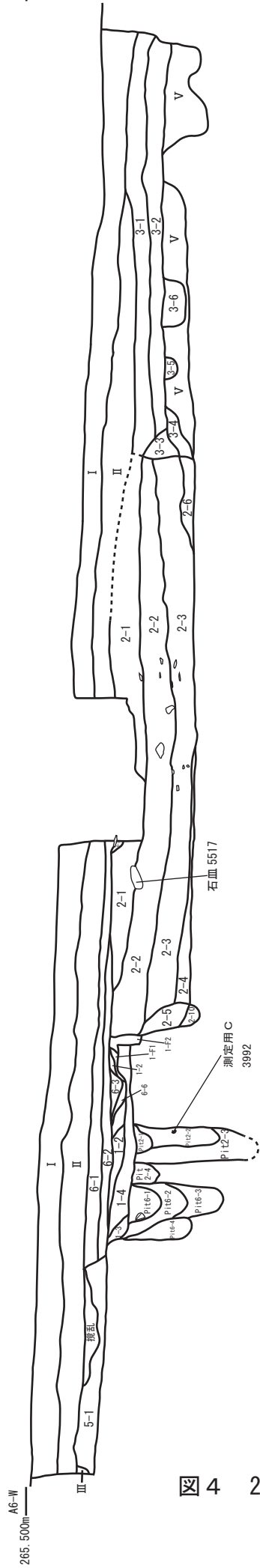


图3 2011年度遺構平面図 (1/60)

基点X=-41135.845
基点Y=-62305.000



A2-N — 265.500m

A2-S — 265.500m

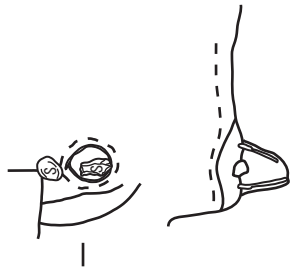
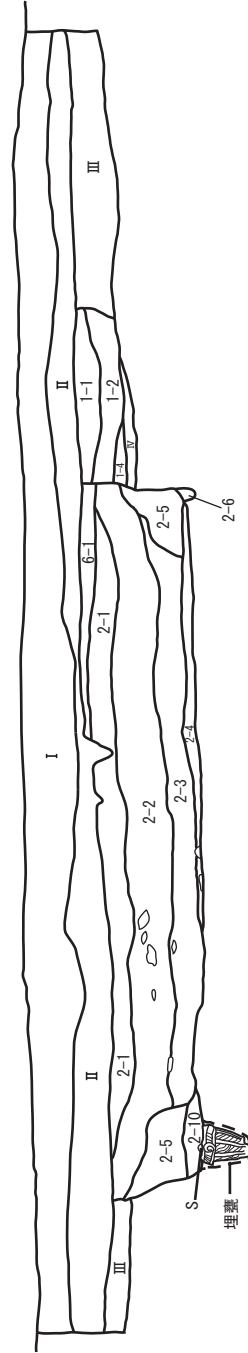


図4 2011年度調査区セクション図(1/40)

I 層
10YR3/2 (黒褐) 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い
ロームブロック 3 ~ 4 mm 30% 下部に直径 12 cm のロームブロックがある
II 層
10YR3/3 (暗褐) 粘性やや大 しまりやや大 やや固い
ローム粒 5 mm 3%、焼土 1%
II' 層
ややボソボソ B トレの II 層に似るがより柔い
III 層
10YR3/2 (黒褐) 粘性大 しまり大 固い
ロームブロック 2 ~ 3 mm 2%
III' 層
10YR3/3 粘性やや大 しまりやや大 やや柔い
黄スコリア 2 ~ 3 mm 4%、炭化物 1 ~ 3 mm 1%
IV 層
10YR3/2 (黒褐) 粘性大 しまり大 固い
ロームブロック 1 cm 5%
V 層
10YR3/3 (暗褐) 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い
ローム粒 2 mm 3%
LB (ロームブロック)
10YR4/6 (褐) 粘性小 しまりやや大 やや固い
I 層注記のロームブロックに相当
地山 10YR4/6 (褐)

SI-01
1-1
10YR3/4 暗褐色 粘性やや大 しまりやや少ない やや柔い
1 住上層 上部に包含層の 1 層が混ざっている
焼土粒 2 ~ 4 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 0.5%、パミス 1 mm 0.5%、
黄スコリア 1 ~ 3 mm 3%、小礫 3 ~ 6 mm 5%、間隙少ない
1-2
10YR3/3 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 1 住下層
焼土粒 1 ~ 4 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 2%、小礫 3 ~ 5 mm 1%、
黄スコリア 2 ~ 3 mm 3%、粘土?パミス 1 ~ 2 mm 0.5%
1-3
10YR4/3 明褐色 粘性やや小 しまりやや小 やや柔い 1 住壁土
焼土粒 3 ~ 5 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 1%、黄ローム粒 2 ~ 4 mm 10%、
弱いロームブロック 1 ~ 3 cm 10%、小礫 1 mm 0.5%、間隙少しあり
1-4
貼床 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色 粘性大 しまりごく大 ごく固い
黄スコリア 1 ~ 3 mm 5%、焼土粒 3 ~ 4 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 1%
1-5 (SOH09 の 1-5 (炉上層)→2-3 に統合)
木の根 or 杭跡
10YR4/4 褐色土 壁体土
ややボソボソ 粘性やや少 しまりやや少 柔い
C1 ~ 2 mm 1% 砂利 1 ~ 2 mm 3% 黄 S1 ~ 2 mm 2%
P2-1
10YR2/3 粘性やや大 しまりやや大 やや柔い
焼土粒 2 ~ 4 mm 3% 炭化物 1 ~ 2 mm 2% ローム粒 2 ~ 3 mm 4%
P2-2
柱痕か 10YR3/4 褐色 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い
ローム粒 2 ~ 5 mm 10% 炭化物 1 ~ 2 mm 1% ロームブロック 1 cm 3%
P2-3
版築層か 10YR4/4 明褐色 粘性やや小 しまり大 固い
ロームブロック 1 ~ 4 cm 10% ローム粒 2 ~ 4 mm 10%
焼土粒 1 ~ 2 mm 1% 炭化物 1 mm 0.5%
P2-4→(SI-05 周溝)
掘り込み時の穴か? 10YR3/4 粘性やや小 しまりやや大 固い
ロームブロック 2 ~ 5 cm 10% ローム粒 2 ~ 5 15% 焼土粒 2 ~ 4 mm 2%
炭化物 1 ~ 2 mm 1%
P6-1 上面貼り床か?
10YR4/4 粘性やや小 しまりやや小 やや固い
ローム粒 2 ~ 5 mm 6% 炭化物 2 ~ 3 mm 1%
焼土粒 2 ~ 3 mm 1% 小礫 3 ~ 4 mm 4%
P6-2 柱痕か?
10YR3/4 粘性やや大 しまりやや小 やや柔い
ローム粒 1 ~ 3 mm 5% 焼土粒 1 mm 0.5% 炭化物 1 mm 0.5%
P6-3 柱痕か?
10YR2/3 粘性やや小 しまり小 やや柔い
ローム粒 2 ~ 5 mm 10% ロームブロック 1 ~ 4 cm 10%
P6-4 SI-05 の壁土か?
10YR4/6 ロームブロック混在の明褐色土
ローム粒 2 ~ 5 mm 15% ロームブロック 1 ~ 3 cm 10%
炭化物 2 ~ 3 mm 1%

SI-02
2-1
10YR3/4 暗褐色 粘性やや大 しまりやや少ない やや柔い
2 住上層 上部に包含層の I、II 層が混ざっている
焼土粒 2 ~ 4 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 0.5%、パミス 1 mm 0.5%、
黄スコリア 1 ~ 3 mm 3%、小礫 3 ~ 6 mm 5%、間隙少ない
2-2
10YR3/3 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 2 住上層
焼土粒 1 ~ 4 mm 3%、炭化物 1 ~ 2 mm 2%、小礫 3 ~ 5 mm 1%、
黄スコリア 2 ~ 3 mm 3%、粘土?パミス 1 ~ 2 mm 0.5%
2-3
10YR3/3 暗褐色土 粘性大 しまり大 固い 2 住中層
黄ローム粒 2 ~ 5 mm 4%、焼土粒 2 ~ 3 mm 2%、ロームブロック 5 ~ 8 mm 5%、
炭化物 2 ~ 5 mm 2%、わずかに間隙あり 小礫 3 ~ 5 mm 3%
2-4
10YR3/4 褐色土 粘性やや大 しまりやや大~中 やや固い (やや柔め)
2 住下層黄ローム粒 2 ~ 3 mm 5%、ロームブロック 5 ~ 8 mm 3%、黒色粒 5 ~ 8 mm 3%、
ロームブロック 2 ~ 4 cm 5%、炭化物 2 ~ 3 mm 1%、焼土粒 1 ~ 2 mm 0.5%、
小礫 1 ~ 2 mm 1%
2-5
10YR4/3 ~ 3/4 やや明るい褐色 粘性やや大 しまり大 固い 2 住壁土
ローム粒 2 ~ 3 mm 5%、ロームブロック 1 ~ 3 cm 5%、炭化物 1 ~ 2 mm 1%、
焼土粒 1 mm 0.5%
2-6
2 住周溝
10YR2/2 ~ 2/3 黒褐色
粘性大 しまりやや大 やや固い
LR2 ~ 3 mm 3% C1 mm 0.5% FR1 mm 0.5% 黄 S2mm1% ベースは 2-5 層
2-7
10YR3/3 褐色土
粘性やや大 やや固い 間隙有
LR2 ~ 3 mm 5% 弱い LB1 ~ 2 cm 2% C1 ~ 3 mm 1%
2-3 に似るが弱くロームブロックを混入
2-8
10YR2/3 黒褐色
LR2 ~ 5 mm 10% LB3 ~ 4 cm 30%
2-7 層に地山を多く混入 地山の再堆積
2-9
10YR2/3 黒褐色
粘性大 しまり大 固い
床面上堆積 枝状の炭化材を含む (径 1 cm 長さ 10 cm 程度)
FR2 ~ 3 mm 1% LR2 ~ 4 mm 4% C2 ~ 5 mm 3% 焼礫 3 ~ 6 cm 3% やや間隙を持つ
2-4 層に比べ明らかに黒くしまり固い 2-4 はロームブロックが目立つ
2-10
10YR3/4 褐色
粘性大 しまり大 やや固い わずかに間隙有
FR2 ~ 3 mm 1% LR2 ~ 5 mm 3% LB3 ~ 4 cm 3% LB は完全なかたまり状
C2 ~ 6 mm 3% 小礫 3 ~ 5 mm 1%
A6 面の 2-9 層に似るが完全な炭化材はない

SI-03
3-1
10YR3/4 褐色土 粘性大 しまりやや大 やや固い 3 住上層
焼土粒 2 ~ 3 mm 2%、黄スコリア 2 ~ 3 mm 5%、炭化物 2 ~ 5 mm 3%、
ロームブロック 5 ~ 8 mm 2%、小礫 3 ~ 5 mm 2%、一部間隙あり
3-2
10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色 粘性大 しまり大 固い 下層
黄スコリア 2 ~ 3 mm 8%、炭化物 3 ~ 5 mm 2%、弱いロームブロック 1 ~ 3 cm 10%、
焼土粒 2 ~ 5 mm 3%、礫 5 ~ 8 mm 1%、間隙少ない

SI-06
6-1 10YR3/3 暗褐色 粘性やや小 しまりやや大 やや柔らかい
ローム粒 2 ~ 3 mm 3%、焼土粒 1 ~ 2 mm 1%、炭化物 1 ~ 2 mm 1%、
小礫 1 mm 1%
6-2
10YR6/4 に近い黄橙色 粘性やや小 しまりやや大 ごく固い 6 住の貼床
ローム粒 2 ~ 4 mm 5%、弱いロームブロック 3 ~ 5 cm 5%、
焼土粒 3 ~ 5 mm 3% (炉の近くには多く含む)、炭化物 2 ~ 4 mm 2%

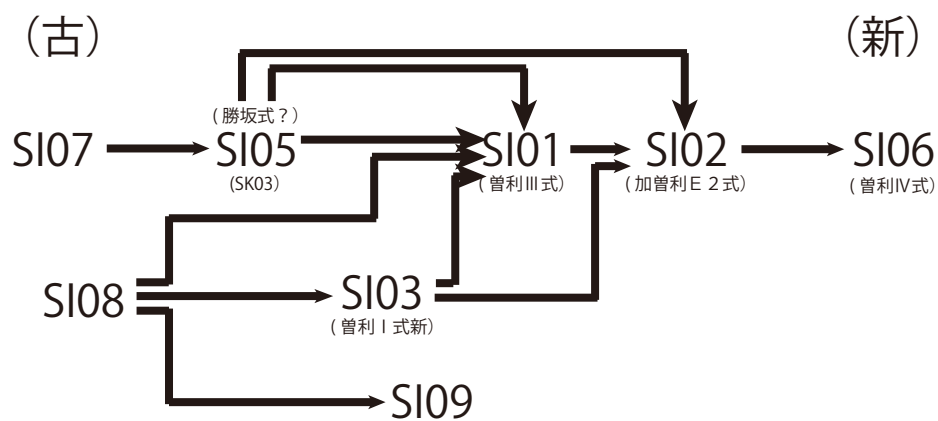


図5 竪穴住居切り合い関係模式図

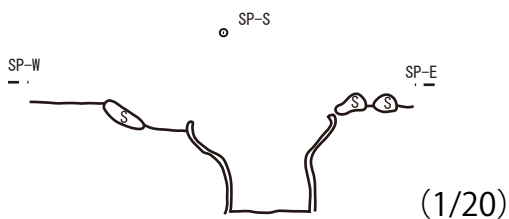
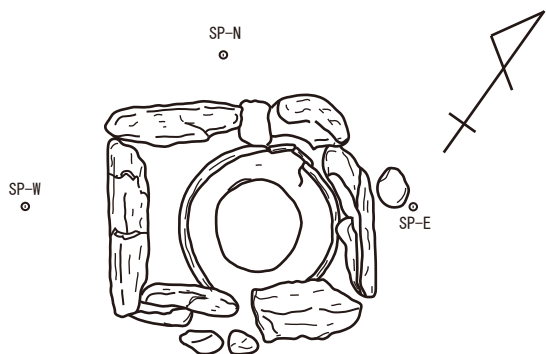


図6 SI-03 石囲埋甕炉

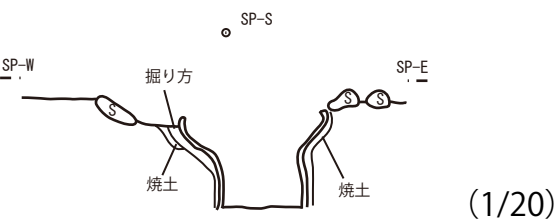
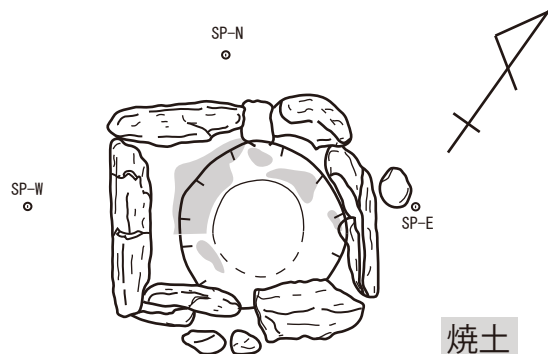


図7 SI-03 石囲埋甕炉焼土範囲

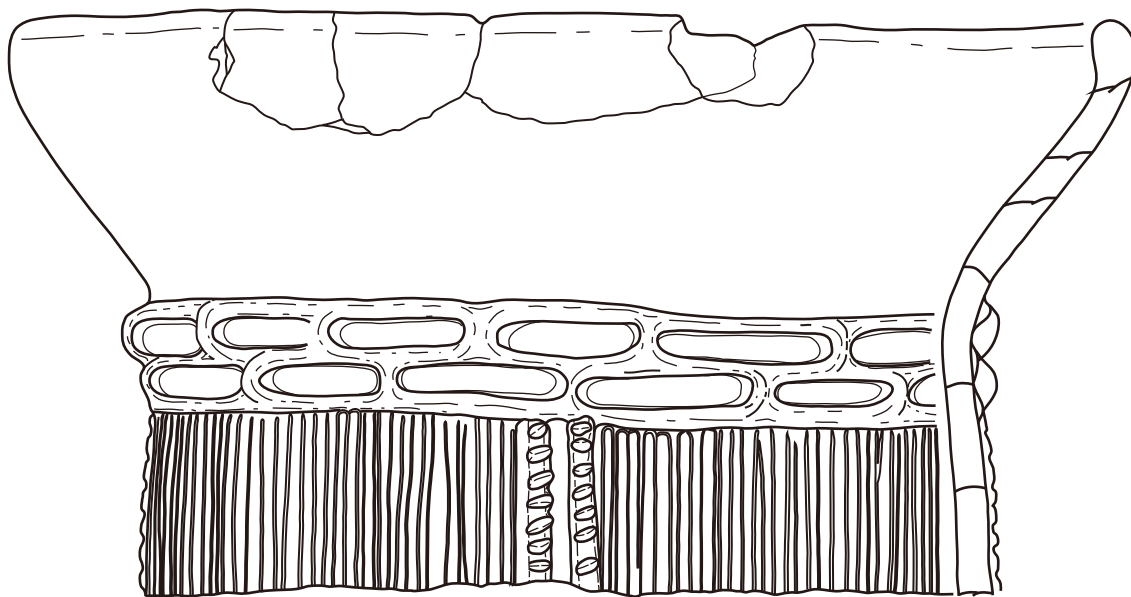
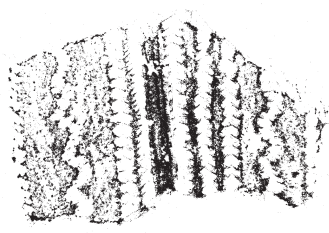


図8 SI-03 炉体土器実測図



(1/3)



1



2



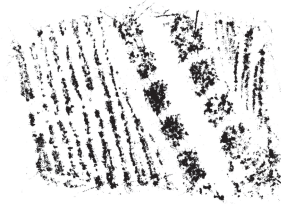
3



4



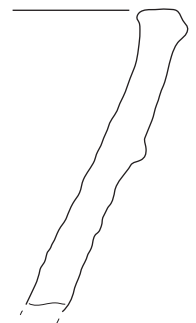
5



6



7



8



(1/2)

图9 2011年度出土土器



写真1 SI-03 炉体土器



写真2 2011年度出土土器



写真3 発掘風景



写真4 遺跡全景



写真5 現地説明会



写真6 SI-02 覆土中遺物集中



写真7 SI-02 埋甕



写真8 SI-01 浅鉢



写真9 SI-02 地床炉



写真8 SI-03 石囲埋甕炉

大日野原遺跡 2011 年度発掘調査概要報告書

印刷・発行日 2012 年 3 月 31 日

編集・発行 中央大学文学部 小林謙一

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
